

今こんといひしばかりを命にてまつにけぬべしさくさめのとじ

〔枕草子十〕我道隆^{○藤原}は生れさせ給ひしより。○一條后藤原定子、道隆女。いみじうつかふまつれど、まだおろしの御ぞ一つ給はぬぞ。何かしりうごとにはきこえんなどの給ふがをかしきに、みな人々わらひぬ。

〔源氏物語乙女二十一〕さゝめきごとの人々は、いとかうばしき香のうちをよめき出づるは、くわざの君の、おはしましつるところと思ひつけや。じりうごとや、ほのきこしめしつらん。わづらはしき御心をと侘あへり。

〔日本書紀神武三〕辛酉年正月庚辰朔、天皇即帝位於櫛原宮。是歲爲天皇元年。○中略初天皇草創天基之日也。大伴氏之遠祖道臣命帥大來目部奉承密策能以諷歌倒語掃蕩妖氣倒語之用始起乎茲。

〔倭訓栢前編大綱一〕反語あり。葦をよしといひ、僧をかみながといふの類是也。爾雅注にも、葦葵本草、言味甘而此云苦葦。古人語倒猶甘草謂之大苦也と見えたたり。小兒初生の時、洗婆臍帶をきるを、ほその緒を繼といひ、生髮をそるを髮垂といふも、反語をもて祝せる也。

〔年々隨筆二〕やまひを歡樂といふは、死喪を吉事といふごとく、凶をさけていへる也。

〔吾妻鏡十九〕承元二年正月十一日辛巳、御所心經會也。去八日雖爲式日、依將軍家實^{○源}朝御歡樂、延及

今日。

〔勸仲記〕弘安二年正月七日乙卯、參殿^下、大納言殿御參内、於直廬可被召御裝束^云云、殿下依御風歡樂無御出、

〔比古婆衣二〕月日の蝕をはえといふ由

さて其蝕をハエと云へるは、日月の光映の翳る、を忌て、反ざまに映と云なしたるにて、死を奈保留、病を夜須美葦を興志など云ふと同じ例なるべし。